

2012 年 12 月 25 日

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

◆研究の目的と計画

SC の特徴として、先行研究から、主節に現れる語句によって文の容認性が変化することがわかっている。例えば、SC では、He makes a better soufflé than he does an omelet. は文法的に認められるが、同じく better を用いた文でも、*I saw better movies than I did plays. は認められない。これらの文法性には、比較級の形容詞を副詞にパラフレーズすることができるかどうかに関わっているという。すなわち、He makes a soufflé better than he does an omelet. のような文では、better は soufflé の出来の良さを示し、I saw movies better than I did plays. のような文では、better は movies の良さを示さない。このように、前者のようにパラフレーズが可能であるとき、SC は容認可能である一方、後者のようにそれが不可能な場合、SC が容認されないという観察がなされている。

こういった観察をもとに、派遣者は、比較構文に出現する形容詞・数量詞と、共起する動詞句との意味的関わりが、文の容認性を左右されると考え、本研究では、形容詞/数量詞と動詞句の示す事象がどのように関係し合ってその文の容認性を決定するのか、という問題に取り組んだ。また、これまで OC と SC に絞って研究を進めてきたため、前述の PC (Phrasal Comparatives) についても、OC や SC との相違点に着目しつつ特徴を整理することを目指した。

◆達成状況と明らかにできた成果

形容詞/数量詞と動詞句の示す事象がどのように関係し合ってその文の容認性を決定するのか、という問題については、比較構文に様々なタイプの形容詞・数量詞を入れた文を広く作成し、その作例の容認性をテストすることで考察を進めた。作例の容認性判断や、仮説の妥当性には、母語話者や研究者とのインタビューを通して調査する必要がある。また、申請者の作例のみならず、現地で得られる言語データや研究資料を利用して、データベースを充実させた。これらの調査を通して、OC と SC の形容詞の基底位置が異なるという仮説を立て、この仮説によって OC と SC の統語的特徴と意味的特徴が捉えられることを示した論文を執筆した（現在進行中である）。

また、派遣先の機関では、日本語の比較構文についても研究が充実しているため、英語の比較構文と照らし合わせる形で日本語の比較構文への考察を深めた。日本語の比較構文は、英語の比較構文と同様の統語的特徴が見られるが、様々な相違点も見られることから、これまでの研究では、日本語の比較構文の比較節と英語の比較節の統語構造が異なるとされてきた。しかしながら、先行研究に指摘される相違点は、これらの比較節の統語構造が異なるという分析の証拠たりえず、むしろ両者は類似した構造を有しているのではないかと仮説を立てた。また、英語の観察で得られたような、OC と SC における比較構文内の形容詞の生起位置の違いは、日本語の比較構文にも見出すことができるのではないかと結論づけ、これによって、日本語の比較構文の特徴を捉えることを試みた。当初の計画では、英語のみの観察にとどめる予定であったが、日本語との対照研究によって通言語的に OC と SC を捉えることに目標を定め直した。このため、PC 分析に当てる予定であった時間を OC と SC の分析に当てることとし、より深い考察を図った。

派遣後の研究発表の予定

本派遣で行った研究をもとに、下記の通り研究発表を行った。

2012 年 10 月 20 日（土）阪大英文学会第 45 回大会（於 大阪大学）

発表タイトル：「日英語の節比較構文における統語構造と意味」

また、これをもとに論文をまとめて近々投稿する予定である。直近では、*Osaka University Papers in English Linguistics (OUPEL)* vol. 16 に論文を掲載予定である。